

# 第一一回日本学士院受賞者略歴

恩賜  
日本学士院賞  
受賞者  
藤本幸夫



専攻学科目  
生年  
略歴

生年	略歴	専攻学科目
昭和四〇年五月	京都大学文学部言語学科卒業	朝鮮語学・朝鮮文献学
昭和四二年三月	京都大学大学院文学研究科修士課程修了	
昭和四三年三月	韓国・ソウル大学校文理科大学研修員（昭和四五年二月まで）	
昭和四八年三月	京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学	
昭和四八年四月	京都大学文学部研修員	
昭和五〇年四月	大阪大学文学部助手	
昭和五三年四月	富山大学人文学部助教授	
平成元年一月	富山大学人文学部教授	
平成元年六月	（公財）東洋文庫研究員（現在に至る）	
同一年四月	富山大学名誉教授	
同一年四月	麗澤大学大学院言語教育研究科教授	
同一年四月	麗澤大学客員教授（現在に至る）	
同一年四月	京都大学人文科学研究所客員教授（平成二八年三月まで）	
同一年三月	韓国・東国大学招聘教授（平成二七年二月まで）	
同一年三月	韓国・東国大学専門委員（平成三一年二月まで）	

## 藤本幸夫氏の『日本現存朝鮮本研究 史部』に対する授賞審査要旨

遙かな昔、百済の王仁が『論語』と『千字文』をもたらしして以来、数多くの中国の典籍が朝鮮半島を経由してわが国に将来された。ことに近世以降になると、中国の典籍のみならず、朝鮮撰述の書を含む大量の朝鮮刊本が伝わり、その多くが日本各地に伝存している。

本書（『日本現存朝鮮本研究 史部』韓国 東国大学校出版部、二〇一八年七月）は新羅から一九一〇年の「日韓併合」に至るまでの「史部」に属する善本書を、全国各地に足を運んで広く渉猟し、その詳細な書誌を集成したもので、先の『集部』（京都大学学術出版会、二〇〇六年二月）に次ぐ研究書である。膨大な数に上る朝鮮本を調査するために、著者の四十年以上に上る足跡は国内で百箇所近くに及び、またもと日本国内に所蔵されていてその後海外に流出した書籍を求めて、ロンドンの大英博物館や台北の故宮博物院・中央図書館にも及んでいる。本書はその研鑽の成果であり、記述はA4判二段組みの書で一千四百八十八ページにも達する。壮観というべきであろう。

二千九百六十件に及ぶ史部典籍調査の結果は、韓国の奎章閣図書分類形式に従って、五十音順に書誌学的なデータが各書とも二十八項目にわたって排列される。書名・撰者・版種・刊者・刊年・刊地に始まり、装幀・寸法・紙質・版式・版心・構成・序文・跋文・刊記等の形式や内容に関する項目を経て、刻手名・蔵書印・藍本（底本）・所蔵者と広い範囲に涉っている。中でも核心となるのは「研覈」（凡例第二七）と題される項目で、いちいちの書籍に関する具体的な調査と考証の過程をたどる内容になっており、そこから導き出された結論が他の二十七項目にまとめられている。伝統的な四部分類の形式に則って整理されてはいるが、単なる図書目録とは性格を異にし、いわば典籍の詳しい戸籍簿を窺うような趣がある。

書籍の分類について興味深いのは、中国撰述のいわゆる漢籍と、漢語によって綴られた朝鮮撰述の書とが、一つの編目に収録されていることである。たとえば「正史類」には司馬遷『史記』・班固『漢書』・陳寿『三国志』と並んで、鄭麟趾等撰『高麗史』百三十七卷や金富軾撰『三国史記』五十巻が収められる。『日本書紀』や『続日本紀』は文言によって執筆された史書とはいえ、日本人の意識としてはあくまでも国書であって、それらを書目で『史記』『漢書』『三国志』と同一レベルに分類することは決してない。同じく中国文化の大きな影響下にある国とはいいいながら、日韓の意識の微妙な違い

がそこに感じられる。朝鮮にあつては、海を隔てた日本とは異なり、中国の文化はいわば地続きの親密感を以て受けとめられていたのではないかとの感慨を抱かされる。もっぱら中国と日本の四部分類法に馴染んだ者には、「別史類」の如く大部分が朝鮮の国書で占められる目録を見ると、異世界に迷いこんだような錯覚さえ感じるほどである。

ただ書籍の排列が通常の四部目録のような成書の順序によるのではなく、奎章閣方式に基づき五十音順になっているために、通常は『史記』が先に、『漢書』が後に置かれるべきところを、『漢書』『史記』の順序になっている。書籍の変遷の跡をたどるには、成書の順序に従うのが合理的であるが、それをあえて無機的な五十音順の排列を選択したのは、朝鮮書誌学独自の方式によるものであろうが、この分野に疎い者にとっては馴染みにくく、少なくとも中国的な四部目録の方法と疎通させる回路を工夫してもらいたかった。

日本に現存する朝鮮本については、これまでも部分的な調査はなされていたが、これほど網羅的にしかも徹底して調査を尽くした研究書は本書が初めてである。その徹底ぶりは随処に發揮されるが、たとえば刊本に関しては、同版・異版や後修・後印の識別を一つの方針として貫いている。それによって一つの典籍について、その刊行の跡をより詳しくたどることが可能になった。また朝鮮本に

豊富な活字本に関しては、木活字・金属活字の識別はいうまでもなく、金属活字の種類にまで言及している。

また本書では判明する全ての刻手（版木の彫り手）名を記録していることにも特別の意義がある。刻手名は版心や欄外などに記されるが、藤本氏はその刻された位置も含めて丹念に記録している。刻手名は一見すると零細な事項のようだが、実は典籍刊行の背景を知る重要な手がかりを提供する資料となる。それによって刊年や刊地、また同版・異版の判別ができる場合が少なくないからである。

一例を挙げれば、021『少微家塾点校附音通鑑節要』五十卷、『新編纂註資治通鑑外紀増義』五卷に関して、多数の刻手名を逐一列挙し、その一部が全羅道刊の『周易伝義大全』などの刻手名と共通するところから、刊地の不明だったこの書もまた全羅道刊本と見なし得ると推定する。また022『少微家塾点校附音通鑑節要』五十巻にも、多くの刻手名が記載されており、そこに併せて刻年が記されているところから、庚辰の年（一五八〇年）ごろの刊行であることを推定する。

同様の手法で刊行年や刊行地を推定することが、0307『古今歴代標題註釈十九史略通攷』八卷、0410『歷代要録』二卷、0929『唐陸宣公集』二十二卷、1520『朱子実紀』十二卷、1833、1835、1838のいずれも『大明律』三十卷、2630『東京雜記』三卷中存一卷などに

ついても見られる。これらはいずれも刻手名という零細な資料を根気よく積み上げ分析する作業を通じて、刊行年や刊行地といった書誌学における重要なポイントを突きとめる手法である。これは日本における中国書誌学で長年にわたり培われてきた方法で、著者は先人の創意と工夫に学びながら、それを朝鮮本の調査に活用している。日本に現存する朝鮮本には保存状態が完全なものが多いので、この手法がことに有効に威力を発揮している。著者の長年の経験と見識によって始めてなし得た成果といえよう。

また朝鮮本将来の経路に関しても、本書は創見に富む。十七世紀以降、朝鮮本はもっぱら日朝外交・貿易を独占した対馬藩宗家によって将来されたが、その多くが官学林家をはじめとする儒者の注文に応じたもので、日本における朝鮮文化導入の足跡と重なる。そこで藤本氏は天和三年（一六八三）の宗家文書『御書物帳』（長崎県対馬歴史研究センター所蔵）に収録される約三千二百冊の旧宗家文庫本（版本）と、対馬に現存する宗家文庫朝鮮本約八百冊を照合し、各所に散在する宗家経由の朝鮮本の存在を初めて明らかにすることに成功した。その一例を示すと、現存九件が確認できる『東國通鑑』五十六巻のうち、東京大学附属図書館本（0182）と早稲田大学附属図書館本（0183）の二点は同じ慶尚道刊本版で、特に早稲田本の「對馬／文庫」の蔵書印からこれが旧宗家文庫本であることは

明白であるとし、さらに早稲田大学の吉田東伍氏旧蔵本には旧宗家文庫本が多く混在すると明言する。その判断の依拠するところは、上記の蔵書印以外に、渋引き褐色表紙に改装された表紙、やや粗雑な料紙、刻手名から慶尚道刊本と判断できる、といった旧宗家文庫本独自の特徴を細部にわたっておさえたもので、長年にわたり朝鮮本を熟視してきた藤本氏の慧眼によるものである。

藤本氏は長年にわたって朝鮮本を世界的な視野で追跡し調査してきたが、その総仕上げともいえるべき成果が、先の『日本現存朝鮮本研究 集部』であり、またこの度の『史部』である。このあと引きつづいて『経部』『子部』等の刊行が予定されている。それらが首尾よく完結すれば、朝鮮書誌学はいうまでもなく、中国や日本の学術文化の研究にも資するところが極めて大きいであろう。

### 主要な業績

- 『日本現存朝鮮本研究 集部』京都大学学術出版会、二〇〇六年二月
- 『日韓漢文訓読研究』（編著）勉誠出版、二〇一四年一〇月
- 『龍龜手鏡（鑑）研究』（附影印）麗澤大学出版会、二〇一五年一〇月
- 『日本現存朝鮮本研究 史部』韓国東国大学校出版部、二〇一八年七月